オポナカムラ彩発見!!

オポナカムラは古代語で「大中村」の意。
国指定史跡「大中遺跡」の最新の調査をもとに、様々な観点からふるさとの誇れる遺跡について考えてみたいと思います。

【問い合わせ】郷土資料館 ☎079（435）5000

弥生時代の食事（再現）

播磨町マスコットキャラクター
いせきくん、やよいちゃん

6 土器からみえる弥生のくらし

弥生時代後期になると、人口がさらに増えるとともに、土器づくりの技術も進歩し、大量消費時代を迎えます。縄文土器に比べ、文様はほとんどみられなくなり、シンプルで実用的な土器がたくさん作られるようになりました。弥生土器は、粘土ひもを積み上げてつくり、野焼きによって600℃から800℃ほどの高温で焼かれたので、薄くても壊れにくい土器でした。

短い首の「壷」は、大切な種モミを蓄え、長い壷は、水がこぼれにくく注ぎやすいため、飲み水などを入れて利用していました。

「甕」は、お米を炊いたり野菜を煮たりするなど、炊飯器やおナベの役割をしていました。そのため、出てきた甕の外側はススで黒くなっています。

食事のようすも様変わりし、一人一人が食器をもっていたようです。食卓では、食べ物を「高杯」に盛りつけ、汁物は、甕から「鉢」に取り分けて食事をしていたようです。お汁などは、木のスプーンを使って飲んでいましたが、食べ物は、まだハシがなく手づかみで食べていたようです。

大中遺跡では、いくつかの竪穴住居あとから山のように土器のかけらが出ています。これは、急激な人口減少により、いらなくなった土器を捨てたのか、病気が発生して使っていた食器を捨てたのかはわかりませんが、大量の土器が住居あとからみつかるのは珍しいことです。

また、家のあとからは、たくさんの小さなイイダコ壷も出ています。浅海に生息するイイダコ漁は、1本の縄にタコ壷を何十個もぶらさげて海に沈め、冬から春先まで漁をしていました。火事で焼けた家を発掘すると、土間にイイダコ壷がちらばっていたことから、漁をしていないときは家の中につり下げていたようです。

さらに、家の柱の穴から、不思議な形をした土器がみつかっています。柱を抜き取った後、中に何かを入れて埋めていたようです。何のおまじないだったのでしょうか。また、家のすぐそばで、子どもの土器棺がみつかっています。小さな子どもの魂が、家族から離れずにいてくれることを願って近くに埋めたのでしょうか。大人のお墓は、まだみつかっておらず、大中遺跡の大きなナゾの一つです。

広報はりま 発行／播磨町役場 〒675-0182（個別番号） 兵庫県加古郡播磨町東本荘1丁目5番30号 TEL 079（435）0355 FAX 079（435）0609 編集／企画グループ 印刷／明光印刷
播磨町のホームページアドレス http://www.town.harima.lg.jp
〃 Eメールアドレス kikaku@town.harima.lg.jp

PRINTED WITH SOY INK
Trademark of American Soybean Association

町の人口 8月1日現在（住民基本台帳人口＋外国籍人口）
34,240人（＋23人） 男…16,830人（＋23人） 女…17,410人（±0人） 世帯数…13,631（＋24）